

○近藤知弥・井手洋一・田代暢哉  
（佐賀果樹試）

2004年10月頃から佐賀県伊万里市の加温栽培施設ナシ園で樹勢が低下する樹がみられようになり、問題となっていた。しかし、原因が不明であったため、2005年3月18日および4月14日に現地施設ナシ園で樹勢が低下した樹の調査を行った。

【樹勢低下の状況】

樹勢が低下した樹を観察したところ、胴枯病、枝枯病等の樹幹病害および白紋羽病による根部の障害はみられなかった。一方、主幹・主枝の粗皮の割れ目に虫糞と思われる塊が多数みられたため、その部位の粗皮を剥いでみたところ、粗皮下部に食害痕がみられた（写真1）。食害痕は主幹・主枝の粗皮下部の厚さ1cm以内の部位にみられ、形成層が食害されていたため、食害面積の広い樹は樹勢回復に時間がかかると考えられた。

【食害虫の同定】

食害部位には淡褐色で動きが活発な大きさ0.6～1.2cmの幼虫（写真2）が多い樹では10頭程度生息していた。そこで、本幼虫を持ち帰って被害樹の粗皮を与えて飼育したところ、白色で1cm前後の繭を形成して蛹となり、蛹から紫褐色で体長が1cm程度の小型のメイガ類と思われる成虫が羽化した。本虫の同定を依頼したところ、クロフタ

モンマダラメイガであることが判明した。

クロフタモンマダラメイガはカキの幹や枝部の粗皮下部を食害する害虫として一般的であり、ナシに対する加害は三重県（1999年）と愛知県（2002年）から報告されている。症状はともに幹や枝部の粗皮下の食害である。今回の樹勢低下の原因は本種の加害によるものと考えられ、九州では初めての事例である。

しかし、現地の施設ナシ園でみられる樹勢の低下が、本種の食害に起因するのかを接種試験等によって確認する必要がある、今後の課題である。なお、幼虫に対する防除対策として粗皮外部からの薬剤散布試験を行ったが、殺幼虫効果はまったくなかった。今後塗布剤を利用した防除や、羽化した成虫を対象にした防除法等の検討が必要である。

本種を同定して頂いた奥俊夫氏（元 果樹試験場盛岡支場）に深甚の謝意を表す。



写真1 クロフタモンマダラメイガ幼虫による粗皮下の食害痕

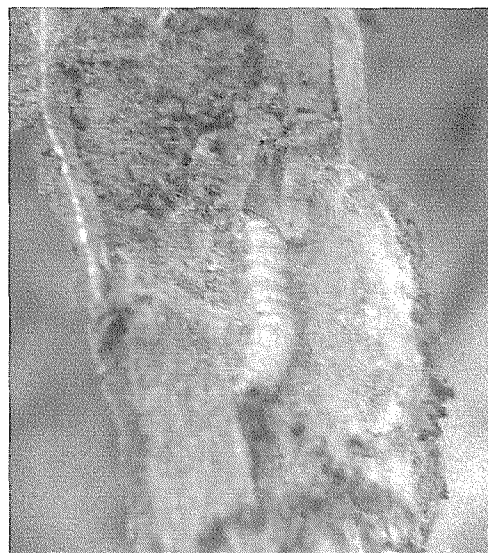


写真2 粗皮下のクロフタモンマダラメイガ幼虫